

# こころ、からだ、いのち

中野 重行

大分大学名誉教授 / 創薬育薬医療コミュニケーション協会 代表 /  
臨床試験支援財団 理事長

## ●身近な譬えでわかること

宇宙が誕生して160億年。地球が誕生して46億年。その地球上に生命が誕生して36億年になるといわれています。しかし、何億年という大きな数値であるにもかかわらず、諸説あって完全には一致してはいません。1億年でも気が遠くなるような数字ですが、こんなに大きな数値になってしまうと、たとえその差が何億年という値であったとしても、私どもは誤差の範囲内のこととして感じ取り、あっさり受け入れてしまうものようです。あまりにも大きすぎて、実感が湧いてこないのだと思います。

その後、生命は進化の歴史をたどり、15万年前に現在のヒトの先祖であるホモ・サピエンスが現れます。現在私たちの有している限りある命は、最初に地球上に誕生した小さな生命の灯をずっと引き継いできて、進化しながら現在に至っています。あたかも『いのちのボタン』を引き継ぎ、そしてこれからも、未来に向かって引き継いでいくというイメージです。

地球が誕生してからの46億年を1年間に置き換えてみると、この話は急にわかりやすくなってきます。生

命が誕生した36億年前は3月20日頃になります。サルから分かれて猿人が現れたのは、12月31日の15時頃になります。現在の私どもの先祖であるホモ・サピエンスが現れてくるのは、12月31日の23時半を回った頃になり、毎年恒例のNHK紅白歌合戦も終わり、そろそろ除夜の鐘があちらこちらで聞かれるようになる頃です。このようにして身近な譬えを使ってみると話が急にわかりやすくなるのは、1年間という私どもの毎年体験している感覚の中で理解できるようになるからです。

## ●冊子制作の経緯

さて、本稿のタイトルに入れた『いのちのボタン』は、長年にわたって筆者の主たる職場となっていた大分大学医学部を、今春、2度目の退職をした際にまとめた冊子のタイトルに付けた名称です。『いのちのボタン』という言葉は、自然に頭に浮かんできて、いまの想いを身近な具体的なボタンに託して、素直に表したものです。一度浮かんでしまうと、これしかないと思えました。「いのち」は漢字の「命」ではなく、平仮名の「いのち」でないと、ピッタリときません。「いのち」は「命」よりも、広がりや深まりがあるように感じるのです。

あまりにも私事になってしまい恐縮ですが、冊子を作ったのは、大学での生活を終了するにあたって、これまでの学究生活50年間のまとめた記録が必要だと考えたからです。医学部の教授が退職する際に、同門の後輩たちが編纂して出来上がることが多い、いわゆる「業績集」ではなく、自分自身で自らの仕事のまとめをしたものです。400頁の厚さになるこの冊子をまとめる作業は、相当なエネルギーのいる仕事でしたが、いままでに蓄積されてきた思い出を整理し、振り返る

なかの・しげゆき 岡山大学医学部卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理学部門に留学。大分医科大学臨床薬理学教授、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬医学講座教授、国際医療福祉大学大学院教授、大分大学医学部創薬育薬医療コミュニケーション講座教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員（元理事長）・専門医・指導医、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員（元会長）、日本心身医学会功労会員・認定医・指導医、日本内科学会認定医、臨床試験支援財団理事長。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ（大分、岡山、東京、長崎、山形）の企画・運営に携わっている。http://www.apmc.jp/





図. 冊子『いのちのバトン』の表紙

良い機会になりました。そして、縁あって仲間となり一緒に過ごした多くの方々から心からの感謝の念を抱いています。

### ●次の世代の方々に引き継ぎたいもの

**筆**者は正式にはすでに10年前に定年退職を迎えており、その際に大分大学医学部附属病院の病院長退職記念として、いくつかの祝賀の行事が行われました。しかし縁あって、大分大学に寄附講座が開設されることになり、5年間の寄附講座「創薬育薬医学講座」を担当し、さらに引き続いて5年間の寄附講座「創薬育薬医療コミュニケーション講座」を担当させて

いただきました。したがって、定年退職後に名誉教授の肩書をいただいてから、さらにプラス10年間の大学での学究生活を過ごさせていただいたことになりません。

『いのちのバトン』は3部構成です。第1部（読み物：OPINION）と第2部（読み物：RESEARCH）は、自分の業績リストの中から比較的読みやすい読み物として22篇を選びました。第3部は業績リストです。10年前（2006年）の正式な定年退職記念行事の記録は、『夢は夢ならず！ Dreams come true. 旅はまだ終わらない！』と題して、『退職記念講演会』『退職記念祝賀会』『仲間たちとのトークコンサート』の3冊にしてすでに作成してありますので、これに『いのちのバトン』が加わったことにより、完成をみたわけです。正直、社会的義務を果たし、肩の荷が下りた感じがして、ホッとしています。

『いのちのバトン』が出来上がって手元に届いた後、同じタイトルのもはこの世にいくつもあるのではないかと思い、ネットで検索してみました。想像した通りいくつも存在しており、人の考えることは似るものだと思いました。『いのちのバトン By 新井 満：希望の木テーマ曲』、『いのちのバトン』（志村季世恵著）、筆者が敬愛して止まない日野原重明先生の著になる『いのちのバトン：97歳のほくから君たちへ』、相田みつお作『自分の番（いのちのバトン）』という小学校・中学校の教科書にも採用されている詩もありました。

つまり、筆者は図らずも、先人たちの想いの結晶である『いのちのバトン』という名のバトンを引き継いでいたことになります。そして筆者の想いの詰まった『いのちのバトン』を、今度は次の世代の方々にも引き継いでいってもらいたいと、心から希望しています。